

令和 5 年 5 月 26 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12709

研究課題名(和文) 松平定信の政治思想 - 対露西亜外交を中心に

研究課題名(英文) Matsudaira Sadanobu's Political Thought: Focusing on Diplomacy with Russia

研究代表者

濱野 靖一郎 (HAMANO, Seiichiro)

法政大学・ポアソナード記念現代法研究所・研究員

研究者番号：10774672

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幕末の「開国」から太平洋戦争の終戦までの政治史・政治思想史を、「天下の大勢」という言葉の変容過程を分析することで、日本思想・政治の特質を抽出したものである。「皆がしている」から「正しい」と考えるとされる日本人の思考様式が如何に成立していたか、を、「大勢」つまりは世界の潮流がそうした方向に向かっているからそれに進むべきだ、という論調の形成によって論じたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまであまり連続性で以て語られなかった徳川時代から明治以降について、思想の基盤が大きく変容しつつも連続していることを立証し得た。また、丸山眞男が「つぎつぎになりゆくいきほひ」として論じ、かつ批判も多かった「古層」論を、近代化論として再評価し新たな視座を与えることが出来た。現在の政治・社会を認識・分析する視座として「天下の大勢」というものが今尚有効であることを示し、政治・社会を論じることに新たな着眼点を提示した。

研究成果の概要(英文)：This research extracts the characteristics of Japanese thought and politics by analyzing the transformation process of the term "Tennka no Taisei" in the history of political history and political thought from the "opening of the country" at the end of the Tokugawa shogunate to the end of the Pacific War. is. How did the Japanese way of thinking, which is said to be "correct" because "everyone is doing it", existed? It was argued by forming the tone of the argument.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：天下の大勢 近世から近代 正当化の根拠 開国 終戦の詔勅 頼山陽 明治維新

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1)

博士学位論文及び日本学術振興会特別研究員 PD で取り上げた問題は、頼山陽の政治思想とそれが幕末維新期にどのような影響を及ぼしていたか、というものであった。それらで上げた成果を踏まえ、研究をより深めるために必要と思われたのは、いかなる経緯で当時の政治状況(とりわけ「鎖国祖法論」)が成立したのか、という論点である。

(2)

所謂「鎖国」的状况を「祖法」と示すのは、松平定信に始まる。山陽は『日本外史』を定信に献上したことで知られており、当時の為政者として別格と高く評価していたことが書簡などから明らかである。幕末維新期における「日本」認識を探るには、定信の政治思想への検討は欠かせない。本課題はそうした問題意識のもと計画した。

2. 研究の目的

(1)

徳川後期に於いて、初めて日本の領土を武力で荒らした外国はロシアである。それ故、黒船(つまりはアメリカ船)を起点に幕末外交史を見るのではなく、ロシア船の来航と通商の要求から幕末外交史を検討しなければならない。それには当時の老中首座である松平定信の政治思想の検討が必要である。オランダ以外と通商・通信を開かない、という姿勢は家光からで、それを「祖法」としたのが定信政権時である。本研究は、松平定信とその周辺の対ロシア外交について、政治観・外国認識といった思想の面から分析していく。

(2)

また、幕末外交研究で重要な点として、「学校」の存在が挙げられる。寛政異学の禁が思想弾圧などではなかったのは、近年の研究で明らかになっている。そこで重視すべきは、後の開国期に活躍する岩瀬忠震等は、学問吟味によって頭角を現した、ということである。また、堀田正睦の学制改革は注目すべきである。佐倉藩は正睦の統治下で藩校を「成徳書院」として建て直し、佐藤泰然を登用するなど洋学もそこで行っていた。西村茂樹・依田学海等、維新政府で活躍する人材も佐倉藩は輩出している。この松平定信研究は、将来的に阿部正弘・堀田正睦研究に続いていくことを想定して行わなければならない(彼らが「頼山陽」をキーワードに繋がっていることは、申請者が初めて主張した点である)。

3. 研究の方法

(1)

当初、本研究は定信の文書の収集から始まり、外交政策に対する認識・思想を分析するものであった。その方法を断念した理由は二つあげられる。一つ目は、中等教育学校での就職により、遠隔地への調査出張を頻繁には行いえなくなったことである。二つ目は、コロナ禍によってそうした作業を断念せざるをえなくなったことであった。結果として、当初の定信の思想を活性化されていないものも含め再検討する、という方法の断念と、研究の方針の転換を余儀なくされた。

(2)

新たな方法として、定信の「鎖国祖法論」から開国以後まで、対外認識がどのように変化していったのか、を「天下の大勢」という言葉を軸に思想通史・政治史的に分析することを取り上げた。言い換えれば、定信の政策としての「鎖国祖法論」を所与のものとして、それがどのように乗り越えられ、新たな日本・対外認識に変質していったか、を検討するものである。

(3)

「天下の大勢」という言葉を取り上げるにあたり、前提となるのは「つぎつぎとなりゆくいきほひ」とまとめた丸山眞男の「古層論」である。導入した海外の思想文化も変質させてきた「古層」と丸山がみなした特質を、実は頼山陽を起点として江戸時代後期から日本の近代化の過程を描写したものである、と捉えなおす。そして、そうした傾向を明治期の普通選挙・民権運動に関係する政治的主張の変遷から浮き彫りにさせていく狙いである。

4. 研究成果

(1)

松平定信の研究としては、現在『韓国実学研究』第45号に投稿中の「松平定信の外交認識と儒学」があげられる。それ以外に、徳川時代における儒学とりわけ「礼」について分析した「日本徳川時代的“礼”」(中国語・日本中華哲学会『日本哲学与思想研究(2017)』2019年)と、幕末維新期の知的状況を整理した「頼山陽の「利」の観念—道德の功利的形成—」(楊際開・伊東貴之編『「明治日本と革命中国の思想史」ミネルヴァ書房、2021)があげられる。

(2)

本研究は結果として、「天下の大勢」という近代日本で強い言説正当化の根拠となった言葉の成立史を政治史・政治思想史的に分析したものとなった。その成果は二つあげられる。一つは『季

刊『日本思想史』83号(2019年)掲載の「時代区分と天下の大勢：伊達千広『大勢三転考』と内藤湖南」である。この論文は時代区分論を特集テーマとした同号で、伊達の「大勢」認識がいかなるものであったかを論じたものである。

もう一つにして本課題最大の成果は、2022年6月に筑摩書房から出版した『「天下の大勢」の政治思想史 頼山陽から丸山眞男への航跡』(筑摩選書)である。同書は、「バスに乗り遅れるな」の掛け声に乗せられて日独伊三国同盟へと向かった、という通説を否定し、まさに「天下の大勢」という言葉こそが、戦前日本で言説の正当化の機能を持っていた言葉と提示して始まる。

通俗的な日本文化論として、「外圧に弱い」「大勢に流される」ことが日本・日本人の特性という主張は一般的なものであった。本研究の成果として、それは必ずしも「伝統」と呼ばれるものではなく、明治近代以降に醸成されてきたものであることを論証した。また、そうした「特性」を「古層」であるとして、「つぎつぎとなりゆくいきほひ」とまとめた丸山眞男の古典的著作も、また、日本の近代化に対する見方と修正を施す方が妥当であると整理した。

本課題の着想は、「日本」の対外認識・姿勢の根幹に松平定信の外交思想が位置していると想定したことである。結果的に、それは定信の「鎖国祖法論」を脱却するための営為から「天下の大勢」論が統治間の中核に位置付けられる経緯をたどり、それらを主導した維新期のリーダー達が政治の舞台から退場するに従って、「天下の大勢」論が大きく変質していく過程を論じることになった。それはまた、「政治的言説の正当化」の近代史をたどったともいえる。さらに、頼山陽の思想が幕末維新时期から明治近代の成立においてどれだけ思想的基盤となり、それが薄れ・変質していったかを描いた。まとめるならば、政治史・思想史をつなげながら、近世から近代を連続するものとして論じた、といえるだろう。

同書の出版に対する反響として、推薦文として渡辺浩「「勢い」と政治」(『ちくま』2022年7月号)、書評で島田英明「よみがえる「論勢」」(政治思想学会編『政治思想と環境』政治思想研究第23号、2023)がある。書評会は琥珀会、日本東アジア実学研究会、東海政治思想研究会、政治理論研究会、日本文明研究フォーラムと5つの研究会で開催された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 濱野靖一郎	4. 巻 83
2. 論文標題 時代区分と天下の大勢：伊達千広『大勢三転考』と内藤湖南	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊日本思想史	6. 最初と最後の頁 41-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 濱野靖一郎	4. 巻 2017
2. 論文標題 日本徳川時代的“礼”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本哲学と思想研究（2017）	6. 最初と最後の頁 289-304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 楊 際開、伊東 貴之、濱野 靖一郎、小路田 泰直、桐原 健真、一坂 太郎、田頭 慎一郎、鍾以江、鈴木 洋仁、中川 未来、高柳 信夫、孫瑛鞠、林 文孝、山村 奨、姜克實、関智英、八ヶ代 美佳、加藤 雄三、黄自進、銭国紅、鍛屋 一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 464
3. 書名 「明治日本と革命中国」の思想史	

1. 著者名 濱野 靖一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 400
3. 書名 「天下の大勢」の政治思想史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------